



実施者

- 《教員》 千葉大学 特任専門員 / 地域コーディネーター 阿部 厚司
- 《学生》 千葉大学 国際教養学部 国際教養学科 4年 桔川 巧
千葉大学 国際教養学部 国際教養学科 3年 今西 洋介, 吉村 歩美, 井澤 爽花
- 《協働パートナー》
【行政】 館山ジビエセンター 【企業等】 ヤマナハウス, 合同会社アルコ
【個人】 ヤマナハウス南房総三芳のシェア里山 代表 永森 昌志, 副代表 沖 浩志, マネージャー 溝口 耕一
合同会社 DIEM 代表社員 大阪谷 未久

1. 背景・目的

令和4年度の野生動物による全国の農作物被害額は約156億円、被害面積は約3万4千haと近年鳥獣被害の深刻化が問題となっている。本プログラムの実施地である南房総市、館山市でも特にイノシシによる被害が深刻化している。野生動物の生息範囲の変化や個体数の増加、高齢化による狩猟者の不足を受け、現在ではただ「獲る」だけでなく、「活用する」ことの重要性が高まってきた。

よって、本プログラムでは、千葉大学のコミュニティイノベーションオフィスと連携している南房総市で複数回の現地実習を通し、鳥獣被害や地域コミュニティ、サーキュラーエコノミーへの理解を深めていった。現地の方と話しながらイノシシの解体や古民家での活動を通し、座学では知り得なかった鳥獣被害の現状や地域の文化、建造物について学んだ他、いかに将来も持続していく取り組みを考えるのが難しいのかを痛感した。活動の最後に鳥獣サーキュラーエコノミーの実現に向けて、房総うちわと鳥獣の骨を使った肥料を活用する提言を行い、ジビエ産業の可能性について考察した。

2. 実施内容

- (1) 実施期間**
- 1) 千葉大学構内 (8/3,8/4,8/29) 計3回
 - 2) ヤマナハウス (8/10,8/23,9/9,9/24) 計4回
 - 3) 館山ジビエセンター (8/10,8/23,9/7) 計4回

(2) 活動内容

1) 千葉大学構内

千葉大学のコミュニティイノベーションオフィスで主に本プログラムの実施目的や全体像、方向性について確認した他、館山の鳥獣被害の現状についても座学で学習した。また、最終提案に向けて各自で提案を持ち寄り、現

地の方からフィードバックを頂きながら議論した。

2) ヤマナハウス

ヤマナハウスでは、ヤマナメンバーの方々と一緒に月例イベントやヤマナアカデミーなどの活動に取り組んだ。イノシシの解体やジビエ料理教室の様子を見学したり、階段の設営や花壇周りの草むしりなどヤマナハウス周辺の整備を行ったりした。大自然の中で土や生き物を実際に目で見て手で触れる体験は非常に貴重であり、多くの学びを得た。また、活動の中でイノシシの捕獲やその活用の難しさを体感し、鳥獣被害問題の深刻さを痛感した。

3) 館山ジビエセンター

館山ジビエセンターでは、千葉県館山市内にて有害鳥獣対策として捕獲したイノシシ等を、食用販売するために処理の様子を見学した。数十匹のイノシシが冷凍保存されている様子や、焼却炉など普段は見ることが出来ない施設を案内していただいた。また、イノシシの革を使ったハンドクラフトのワークショップにも参加した。イノシシ革は繊維が密で耐水性が非常に高いため、財布やハンドルカバーなどに商品化することで革を活用出来ると学んだ。

3. 成果と課題

(1) 地域貢献面

地域での活動や地域の方々との交流を通して、有害鳥獣問題に対する私たち大学生目線のアイデアを提供することが出来た。活動終了時にプレゼンテーションにて、イノシシの残骨を活用したうちわと肥料づくりを提案した際、好感的な感想をいただいた。斬新なアイデアは提供できたと感じる一方、その実行および有害鳥獣問題の根本的な解決という最終的な目標に向けては、あまり着手できていない。今後は、提案内容を自分たちの行動に落とし込み、実現に向けて動いていく必要がある。



1 イノシシの解体 (左上) 2 イノシシ革を使ったワークショップ (右上) 3 房総うちわとイノシシ革 (下)

域学協働の工夫！

- ★大学での座学、ヤマナハウス、館山ジビエセンターと複数カ所を訪問したことで、多面的な学びと経験を得ることが出来た。
- ★上記の三カ所以外にも南房総市を巡回したことで、地域の地理的・文化的特徴を体感したうえで本課題に取り組むことが出来た。

(2) 教育・研究面

8/10に現地を訪問した際、安房高校の生物学を勉強している高校生と一緒にジビエセンターに訪問した。その際に、周りに大学生が多くないことから受験や大学生活についての相談を受けた他、活動中に国際教養学部で学際的な学びをしていることを活かして、鳥獣被害を単なる害として捉えるだけでなく、様々なアプローチでそれらを解決、また活かす思考プロセスについて一緒に考えた。

3. 今後の展開

今年度は、有害鳥獣問題の現状や課題について座学で学んだ後、ヤマナハウスや館山ジビエセンターへ訪問し、その実態や課題の深刻さを体感した。有害鳥獣問題について様々な角度で関わることで、多面的な知識やスキルを身に付けることが出来た。今後は、これまで培った経験や地域の人々との関係性、課題解決への意欲を十分に活かし、実践的かつ効果的な活動にしていきたい。具体的には、ヤマナハウスで提案したイノシシ残骨の活用を実際に施行したいと考えている。処分に困る残骨をうちわや肥料などに商品化することで、あらゆるステーキホルダーの課題が解消され、その上で館山および南房総市のイノシシ等をブランディング構築していきたいと考える。

*表彰・マスコミ掲載など
・特になし